

オーガスタスの証言

その時俺は教練に入学したての一年で、草むらに横に成ってた。
教練の訓練スケジュールがきつくて、『やってられっかよ』
ってサボってたんだ。

風の心地良い良い、青空が広がり晴れ渡る四月の午後で、大木が側に立つ、草丈の高い草原の小高い丘で、俺は草に隠れ、安眠を貪ってた。

茂みの向こうで人の気配がした。

高い草丈が、でも俺をすっぽり隠していたから、見つけられずに過ごせるだろう。そう思い、頭の後ろで腕組んだまま、仰向けに寝転がっていた。

やがて野太い声がした。

「俺の為に穴(けつ)貸せ。

そしたら...この先いい目見させてやる。

なあ...?

減るもんじゃ無いだろう？」

どさっ！

「離せ！」

どすっ！

殴る音がし

「...う.....！」

呻き声がした。

...それで俺は、やれやれ。と思った。

流石に助け出さなきゃならない様子だ。

のそり。と体を起こし、声の方向に体を乗り出した時だった。

突然視界に、相手の野郎が顎を曝し吹っ飛ぶ様が、飛び込んで来た。

そいつは...ローフィスだ。同じ一年だと言う事は、一目で解った...腹を押さえ、身を起こした。

どうやら押し倒された時、暴れて腹を殴られたらしく...右腕回して腹を庇いながら、前傾したままゆらり...！と立ち上がり、倒れる上級生を、上から覗き込むように覗う。



ローフィスの顔は苦痛に歪んでいたし、倒れた野郎はガタイがそれは、良かった。

多分...三年だろう。

三年は、一・二年の監督生をしていて接点があった。

ともかく...そいつはなかなか起き上がって来ない。

成り(当時ローフィスはそれ程大きく無かった)の割に、なかなかのパンチを放つ奴だ。野郎にケツ狙われる一年としては。

俺は少し感心してローフィスを見つめた。

ようやく...野郎は頭を起こし、首を横に二・三度振り、正気を取り戻す。

がローフィスは、野郎が起き上がるその前に素早く...これにはびっくりした。あんなガタイのでかい男のパンチを腹に喰らったときながら、そりゃ軽やかに。

倒れてる野郎の横に回ると、横っ腹を思い切り蹴り上げた。

がっ！がっ！

二度、三度。

野郎は草の敷き詰められた坂を転がり、ローフィスは追いかけながらも四度、五度と野郎の腹を蹴る。

それが...腹立ちから来る、狂気のような怒りだったら流石の俺も止めに入ったろうが...その激しい蹴りに似合わず、奴の顔は冷静だった。

喧嘩慣れしてるな。こいつ...

そう...俺は思った。

坂の下でとうとう、俯せに野郎は倒れ、身動きをしない。

ローフィスはやはり腹を右腕で押さえたまま、様子を前屈みに伺う。

野郎が短く呻き、ローフィスは短い吐息を吐くと、屈む身を少し起こし、その場を後にしようとした。

野郎は痛みの為か、小声で呻くようにつぶやいた。

「...覚えてろ...！」

俺はお前の、監督生なんだからな.....！」

ローフィスは振り向くと、ささやく。

「ああ...。覚えといてやるぜ...！」

そして、草丈の高い草原の坂を登り始める。

途中、腹が痛むのか、くっ！と身を前に折り、足を滑らせそうに成り、俺は思わず...駆け寄った。

黙って奴の肩下に肩を滑り込ませ...そして肩を担ぎ支える。

ローフィスは振り向いたが、俺は奴を見なかった。

奴もすぐ前を、向いた。

普通なら何か言うもんだが、ローフィスは何も、言わなかった。

「見てたのか？」とか「人が悪いな」...そんな事を。

黙って俺の肩を借りたまま、一緒に歩いた。

それで...俺は直感した。

こいつとは...一生付き合える友達に成る。と。

俺達は黙って...丘を上がって行った。

心地良い風が頬を撫でた事を覚えているし...担ぐそいつの肩の温もりに親近感を覚えた。

奴の宿舎の部屋の扉の前まで...そうして付き合った。

戸を開ける奴を見てようやく...俺は奴の肩の下から自分の肩を、引き抜いた。

そうしてやっと、奴を見る。

痛みはかなり引いた様子で、奴は長身の俺を見上げ、長年の友に声を掛けるみたいに、言った。

「よお...」

俺は思わず苦笑した。

同じ一年だと知ってたのか？とか...俺の事を知ってるのか？とかを...聞きもせず。

そして奴に、言った。

「薬草は、持ってんのか？」

ローフィスは気づき、懐を叩いた。

それで俺は頷き、背を向けようとした。

ローフィスはさりげなく言った。

「今夜の夕食で会えるな」

夕食の席で顔を合わせるのは、一年生だけだ。

それでやっぱり...質問は意味が無かったな。

と、質問を口にしなかった自分を褒めた。

ドアが閉まり...俺は階段を下りながら...奴の部屋は外階段に面し、風が吹きっ晒す二階にあった。

くすくすと、笑っていた。

やつのやり様が心底、気に入って。

それからだ。

奴と俺は、まるで幼馴染みのような口を利き合ったし、同学の奴らも

「お前ら、同郷の馴染みか？」と聞いて来て...俺達は顔を見合わせ、笑ったもんだ。

聞いたらやっぱり奴も長旅をしていて...初対面で相手がどんなだか、直ぐ解るようだったし、付き合い方も知っていた。

俺は...餓鬼の頃奴隷宿舎でしょっ中新入りを迎え...他人だらけの中に居たから、似たようなもんで...

俺の境遇をふとした事から話したが...奴にやっぱり同情の色は浮かばず、どっちが悲惨な体験をしたかを、競い合って話した。

ただ.....奴は真顔で俯いたまま、つぶやいた。

「親父さんもお袋さんも居ないんじゃ、辛いだろう...」

ぽそり。と。

それで俺はいつもの決まり文句

『身軽でいいさ。五月蠅くも煩わしくも無い』

を使わず、本音を言った。

「まあ...たまにな」

ローフィスは俯き...俺を見ないまま頷いた。

それで俺は...奴は間違い無く俺の親友と呼べる男に成る。

そう...確信し...結局.....その、通りに成った。

ローフィスの証言



その時の事は良く、覚えてる。

三年のジェイラスはごつくてガタイがデカく、態度もデカイ男で...。
一緒に奴の監督下に置かれた二年のファーガスンは、心から怯えていた。

ファーガスンは良く女の代わりにされてる。とやはり、二年で同じ班のランスティルに聞いた。
だがランスティルは含みある瞳で、俺を見た。

「まあ...ファーガスンみたいなのが好きな奴が、それは多いが...。
好みは人それぞれだ」
俺は、どういう意味だ？と、聞く気も無かった。

だから...ジェイラスが「こっそり入手した高級酒がある」と俺を誘った時、まさかそれが...俺をどうこうする気だとは、
てんで気づかなかった。

第一シェイルみたいな飛び抜けた美貌の持ち主の義弟を持ち、俺の方を押し倒そうとする奴が居るなんて、誰に想像
付く？

...ともかく...

自分でもあの時間抜けてる。と思ったが、押し倒されて初めて奴が冗談カマしてるんじゃなく本気だと気づき、正直、
頭の中が真っ白に成った。

理解不能だ。

俺を押し倒して楽しい。と思う男が居るなんて。

...で結局、先手を打たれて腹に喰らっちゃった。

大抵の事には驚きもしない、世間ズレした俺だったが、あれは流石に...

びっくりした。

だが腹の痛みで正気を取り戻し、ついでに奴にも正気に戻って貰う為に、思い切りブン殴った。

だが奴はまだ正気に戻らず、俺は掛ける水が無いので代わりに奴の、横腹を思い切り蹴り倒した。

体がデカイからきっと、脳に到達する迄時間がかかるんだろう。

そう思い、ついでに俺の貞操も守る為に(自分で自分に言い聞かせながらも、呆れた。男相手に貞操を、俺が護る必要が生じるだなんて)、念入りに蹴ってやった。

俺が男に迫られた時と言えば、嫁さんに逃げられた木こりが、最初シェイルを手込めにしようとするからブン殴り、シェイルを逃がした後木こりに泣きつかれた。



切羽詰まってるし、大人の事情に長けるにはもう少し年取らないと解らないだろうが、どうしても相手が必要だ。
結婚の時絶対別の女とは寝ない。と誓っちまったから、女には頼めない。
シェイルが駄目なら、俺でいいから相手してくれ。

そう...

言って俺の返事も聞かず押し倒して来るから、股を思い切り蹴り上げ、気の毒だとは思ったが、俺は叫んで逃げ去った。

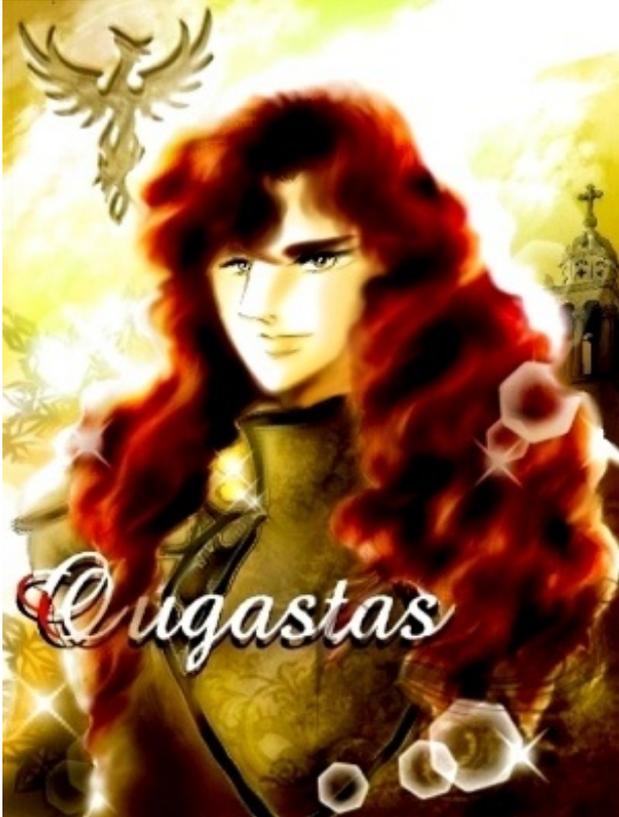
「いくらあんたが可哀相でも、これだけはごめんだ！
他を当たってくれ！」

...ともかく.....。

何が起こったのか暫くショックで呆然としつつも丘を登り、腹の痛みが現実を、思い出させた。
途端...だった。

肩下に滑り込む体温と...デカイ体の感触。

奴は力強く俺の肩を支え...俺はふい。と奴を見た。



入学式の上級との顔合わせの時、奴は一際高い背と体格とで目立ちまくり、上級生の感嘆の声音にも、見せ物のように
その場全員の注目を浴びてもビクともせず、一年離れした貫禄を見せつけた。

笑顔が印象的で、人の心を一発で溶かし、つい奴には何でも打ち明けちゃう...

そんな...親しみ易い笑顔だった。

皆誰もが、「ヤツは大物だ」そう思ったし、そう思わせるだけの風格を、ヤツは一年ながら持っていた。

奴が俺を、見ない事で俺にはさっきの顛末を、奴は全部知ってる。と解った。

自覚があったらバツが悪かったろうが、俺はまだ、自分の身に起こった出来事の心の整理が付かず、つい、黙って肩を
借りた。

宿舍の自室迄には随分道のりがあった筈だがその間オーガスタスは一言も

「良くある事なのか？」

みたいな、同情的なセリフは吐かず、俺をほっとさせた。

もし聞かれていたら、怒鳴ってたろう…。

腹の痛みを軽減させるだけの力持ちのガタイ良く、俺に気良く肩を貸す、大事な看護師(オーガスタス)に向かって。

「黙ってる！俺だって教練の噂は嫌と言う程聞いて、『騎士気取りの貴族野郎は夜盗と変わらず、平気で下級生を女の代わりにする』と、ちゃんと知ってる。

がまさか、俺を押し倒そうとする趣味の最悪な変態野郎が居るだなんて、そこまでひどいとは思わずショックでどうにか成りそうなんだ！」

と……………。

オーガスタスはもしそれを聞いたら、目を見開いたろう…。

ともかく…俺の殴られた腹だけで無く、気持ちも思いやる、そのデカイ体のライオンに、俺は心の中で感謝した。

自室の扉を開ける頃には、腹も心も落ち着いた。

奴は彼の肩を外し…そして俺は、ガタイのやたらデカイ男は、大嫌いだった。

自分はそれ程小さくないにしても…デカイ男達は大抵馬鹿で、態度がデカくて威張っていたからだ。

(俺がデカイ男が嫌いな顛末を話すと長く成るが、ともかく…俺に好意を持つ女の子が好きだったそのデカブツは、身の程知らず。と俺に思い知らせる為にそのデカイ体にモノ言わせ、脅しまがいの命令を俺に言い渡した。

俺を奴の使い走りにし、好いた女の前で『ヤツはこの程度の野郎だ』と、見せびらかす為に。

当然、奴の下に就く俺に彼女は軽蔑するし、俺への好意を無くすだろうと。

その脳味噌の少ないデカブツは思ったんだろう…。

(もう少し脳味噌があったら絶対俺をやっかむ前に、身なりを構う。

せめて…二日に一辺くらいは、風呂に入ってた筈だ。

臭い男は女に好かれないと、どうして解らないんだ?)

…ともかく、俺は嫌だと言ってやった。

俺は見くびってたが、奴は脳味噌が無い代わりに怪力を持っていた。

今でも悔しいが、木の根に足を取られ、あいつに掴まり…そしてその怪力で思い切り体を、捻られた。

ぼきっ。と言う鈍い音と激痛を、今でも思い出せる。

ともかく俺は背骨を折り…見ていたシェイルが親父を呼び…親父は枕元で医者代わりの呪術師の、判断を聞いた。

「…直…死ぬか、良くても手足が動かせなくなる」

シェイルがそれを聞き、あの大きなエメラルド色の瞳を悲しげに瞬かせ、必死で俺の手を、握りしめていたのを思い出す。

俺は…シェイルがあんまり綺麗で可愛くて

「こんな天使に看取られて逝くのは、悪く無いかも」

とその時あまりの痛みでつい...そう思った。

が、親父はシェイルの頭をぐりぐり撫でると、ぶっきらぼうに怒鳴った。

「安心しろ。どっちにもさせない」

シェイルはいつも...親父が言った事を必ず何とかする。と知っていた。でもシェイルがこう思ってるのは、解った。

『食べ物が無いんじゃなく、暖かな毛布が無いんじゃないのに...』

親父はいつも、旅先で無くて困るものを必ず、どこからか調達して来たからだった。

俺達チビ二人を安全な洞穴に待たせ、二日以上かかって、ズタボロに成って戻っても。

必ず、俺達にその手の平を開いて見せた。

『ほら。ちゃんと持って帰つたろう?』

その信頼を、親父は裏切った事が無い。

だが...俺でも思った。

俺を直す薬草も手段も、知り尽くしている専門家の呪術師がそう言ってる以上、他に手段は、無いだろう?と。

...が、親父は俺にありったけの酒を飲ませ...シェイルに酒瓶渡して、痛むようならそれを飲ませろ。と言って荷馬車の荷台に俺とシェイルを乗せ、馬車を走らせ続けた...

親父の目指す地に、辿り着く前に俺は自分でも事切れる。と思ったが、虫の息で着いた途端、痛みは突然引き...暖かい光にじんわり、包まれたように心地良くて...それを感じた時、気絶していた。

目が醒めると...横でシェイルが、大きなエメラルド色の瞳からぼろぼろと涙を、真珠の滴のように流して

『ああ...綺麗だな』

そう...思った事を覚えてる。

その不思議な場所に...一週間は居たろうか...

住民は皆、背が凄く高く、皆白っぽい姿をしていた。

ここは天国で彼らは天使に違いない。そう思う程、彼らは皆素晴らしく美しかった。

...だが、見慣れた親父の顔もある。

親父は跳ねた栗毛の髪と鼻髭を揺らし、荒っぽい伊達男...の風体のいかつい表情で...そして、きらりと光る宝石のように透けた青の瞳を真っ直ぐ俺に投げて...ぶっきら棒に言った。

「...くたばるにゃ、まだ早い」

俺は...幾つの時だったろう...?

ともかく...7・8才...そんな餓鬼だったと思う。

俺が溜息付くので、親父は俺が横たわる寝台に屈んで顔を寄せた。

『どうした？』その表情につい、言った。

「一気に夢が覚めるぜ…。」

激痛のご褒美としちゃ、俺は出来るだけシェイルの顔を眺めていたい……」

俺が元気なら頭をはたかれたろうが…その時親父はやっぱり俺の頭をぐりぐりなせて…唸った。

「もう暫くはそうしてやる」

そして…背を向けた。

広い肩幅…。大きな背。

一瞬見せたその横顔の…その瞳にきらり…。と涙が、光った気がした。

…後にその天国は『光の里』と呼ばれる、『光の民』の住む場所で彼らは…神のごとくの奇跡の力を、持つ種族だと知った。

ほら…やっぱり長く成ったろう？

ともかくそれ以来、俺は図体のデカイ男を、毛嫌いし続けたしそんな奴らを叩きのめす攻略法を、練り続けた)

だがオーガスタスに向かって俺は直ぐ、顔を上げ言った。

「よお…！」

自分でも意外だった。

奴は俺が、一目で敬遠するガタイなのに。

例え、肩を、借りたとしても。

優しいデカイ男は大抵が図体の割に優柔不断で……。

ともかく利口なデカイ男に、出会った事が、俺は無かった。

ぐずぐずと良い訳がましく行動に出れないか…それとも威張って乱暴か…。

大抵そのどっちかだった。

だがどっちも…脳味噌が無い。

親切にしては貰っても…やがて俺に何かをさせようとし、俺がぐずると、途端思い出させる。

俺は小さく、自分は俺をねじ伏せるだけの力と体格があるんだ。と。

そんな付き合いは真っ平だし、奴らは結局、俺を子分に従え…丁の言い使い走りにさせるだけだ。

だが俺の言葉に、奴は苦笑いして言った。

「葉草は、持ってるのか？」

持ってない。もしそう言ったらきっとこの、貫禄ある優しい顔をしたライオンは、医務室まで俺を抱えるか…それとも

単独で出向いて薬を、持ってくる腹だ。

そう...読めたから俺は、懐に常備してある薬草袋を、上着の上から叩いて示した。

『必要無い』と。

俺は信じ難かったが...その人懐っこい笑顔と軽い頷きでようやく...確信した。

利口で気持ちの通じる...本当にそのガタイに見合った、懐の広い男も、世の中には居るんだと。

だから、奴に言ってやった。

「今夜の夕食で会えるな」

また会った時、俺は奴に言った。

「よお...！」

自分でも不思議だった。が直ぐ納得いった。

懐の広い...奴が俺にそう、させるんだと。

奴は例の...屈託無い、親しみ易い笑顔を浮かべ、頷いた。

奴の周囲にはもう、奴の人柄を慕う男達が侍っていたし、俺はその中の一人に、過ぎなかった。

だがオーガスは周囲の男達に隔て無く付き合う。

侍る男達をだれ一人、奴は子分にする事無く、いつも対等の付き合いをする。

それが気に入り...そして皆が、奴自身をも気に入り.....事ある毎に俺達は、奴を取り巻いた。

そして...同じ学年の、面だけが取り柄の嫌味で悪行だらけの最低な大貴族、グーデンを敵に回しても...誰も、慌てふためかなかった。

オーガスが、居たからだ。

身分が低かろうが...オーガスの態度と風格はいつも、王族の血を持つグーデンを圧倒した。

俺達はオーガスを取り巻き...そしていつも、愉快地笑って過ごせた。

奴が居なけりゃ...きっとグーデンは幅を利かせ、それは...窮屈で退屈だったろう....

だがオーガスはそれを一度も、恩に着せた事が無い。

皆が皆...言葉にはしなかったが奴の恩に報いようと...奴の望む事を率先し、した。

「正義の味方面しやがって！」

グーデン一味に言われたが、平気だった。

オーガスと一緒にやる“正義”はいつも、痛快で愉快だったからだ。

奴の境遇が、何だってんだ？

奴隷上がり。もし誰かがオーガスタスの事をそう蔑んだら、俺達は黙っていないだろう…。

俺は後年…神聖神殿隊付き連隊に入り、そして『光の民』を身近に知った。

奴らは光の力を持ち…常に光りに包まれている。

光とはどういうものか。

それが近くにあるだけでどれ程の不安や恐怖が去ってゆくか。を…俺は目前で思い知らされた。

奴らが部屋に、入って来る。

それだけで、空気が違った……。

勿論、『光の国』の『光竜』をその身に宿すディアヴォロスもそうだったが、彼は特別で別格だと、思い込んでた。

だが…『光の民』に出会った時俺はようやく解った。

オーガスタスも…そうなんだ。と。

奴が部屋の中に入ってくる。

途端…安心感と頼もしさが広がる…。

恐怖も不安も…綺麗に消え去って行く。

奴は列記として人間で…光の力なんて持っちゃいないのに。

だから…俺は今でも、デカイ男は大嫌いだ。と胸を張って言える。

ディアヴォロス？奴は別格だしオーガスタスは例外だ。

『光の民』？

奴らはデカインじゃない。

デカイのが、当たり前で、ああいう人種なんだ。

それに…奴らは子供を、大事にする。

俺達は奴らにとっちゃ子供のような身長で…。

人間の脳味噌の無いデカブツとは、訳が違う……。

それを聞いた時、オーガスタスは肩を竦めた。

「つまり、俺もディアヴォロスもお前のデカブツ嫌いを、直せなかったんだな？」

俺は…勿論、思い切り頷いた。

※注釈 ローフィスの言うデカイ男。とは、身長2 mを越す男達の事を言います。

